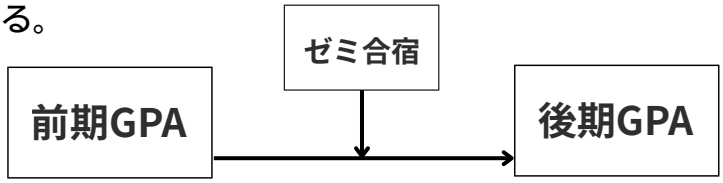
夏季休暇中のゼミ合宿参加によるGPAの推移の違い

教育心理学研究室1期生

問題と目的

・夏季休暇が学力に対して負の影響を与えることが、系統的レビューに基づく先行研究群の統計的統合のメタ分析の結果、明らかとなっている（Cooper et al.,1996）。
・国内では夏季休暇が学業成績に与える影響について十分に検討されていない。
・本研究の目的は、大学生の夏季休暇の過ごし方が学業成績に与える影響を検討するために、夏季休暇中にゼミ合宿に参加することによるその前後のGPAの推移の違いについてを明らかにすることである。



対象と方法

・対象　日本大学経済学部3年生
（縁故法、学内掲示による募集）
・調査実施期間　2026年6月24日から7月31日

質問紙調査

・前期GPA 、後期GPA、
ゼミ合宿参加の有無

結果

回答数　36名
不整合な回答（GPAが0など）除外
分析対象者数33名（学部生の2%)

Table1
前期GPA、後期のGPAの平均と標準偏差

	M	*SD*
前期GPA	2.42	0.59
後期GPA	2.52	0.52

Table2
ゼミ合宿参加有無による、前期GPA、後期GPAの平均と標準偏差

	参加（*n*=16）		不参加（*n*=17）	
	M	*SD*	*M*	*SD*
前期GPA	2.32	0.64	2.52	0.55
後期GPA	2.52	0.58	2.53	0.48

Table3
前期GPA、後期のGPAの差分の平均と標準偏差

参加（*n*=16）		不参加（*n*=17）	
M	*SD*	*M*	*SD*
0.20	0.34	0.01	0.36

・前期GPA、後期GPAの差分の平均値の差の検定
$t(31) = 1.58, p > .05$

・Cohenのd（標準偏差を基準とした2群の分析のずれの大きさ）
0.53（95%CI　[-0.51，1.22]）

考察

・本調査において、夏季休暇のゼミ合宿参加者は前期から後期にかけてGPAが平均0.2上昇しており、プラスの変動傾向が確認された。統計的仮説検定では有意差が見られなかったものの、これはサンプルサイズ（ケース数）の不足が影響している可能性が高い。
・この記述統計的な傾向は、夏季休暇中にゼミ合宿に参加することが、前期から後期にかけてのGPAの推移に正の影響を与えることを示唆している。

引用文献

Cooper, H., Nye, B., Charlton, K., Lindsay, J., & Greathouse, S. (1996). The Effects of Summer Vacation on Achievement Test Scores: A Narrative and Meta-Analytic Review. *Review of Educational Research, 66*(3), 227–268. https://doi.org/10.3102/00346543066003227